

けていました。気温の変化によって、心臓や呼吸器疾患が悪化したり、熱中症を発症したりして、死に至るのです。

この研究が始まるまでは、多くの研究者が暑さによって健康が損われると予想していました。しかし実際には、熱中症など高温によって死亡する人は0.3%程度に過ぎず、それよりも各地域で最も死亡が少ない気温（至適気温）を下回る気温で死亡した人が540万人と9割以上に達してい

ました。

環境と人間の健康を大きな目でとらえると、環境の変化に対応して、健康を維持・増進するための対策を講じることができます。子どもたちの健康を守るために、これからも、世界的な広い視野を持った疫学研究を進めます。

次号（2016年6月号）では「熱帯医学研究所免疫遺伝学分野」を取り上げます。

新興・再興感染症

マラリア

熱帯・亜熱帯を中心に毎年2億人以上が感染
マラリア原虫を蚊が媒介、旅行者は注意を

マラリアは世界100カ国以上で流行している感染症です。世界保健機関（WHO）の推計によると、熱帯・亜熱帯地域を中心に年間2～3億人がマラリアにかかり、毎年約50万人以上が死亡する、結核やエイズと並ぶ重要な感染症の一つです。特にアフリカのサハラ以南で、患者の9割以上が発生しています。わが国では近年、国内での感染例はありませんが、海外旅行中などに現地でも感染する方が毎年数十人程度います。

マラリアはマラリア原虫を持った蚊（ハマダラカ）に刺されることによって感染します。体に入ったマラリア原虫は血液の中の赤血球に好んで寄生して、赤血球を次々に破壊します。

ヒトに感染するマラリア原虫は、「熱帯熱マラリア原虫」「三日熱マラリア原虫」「四日熱マラリア原虫」「卵形マラリア原虫」の4種類です。原虫の種類によりますが、感染後およそ10日ほどたってから、38℃以上の発熱や倦怠感といったインフルエンザのような症状が出ます。熱は比較的短時間で下がりますが、周期的に発熱を繰り返します。この発熱周期は原虫の種類によっても異なり、48時間ごと（三日熱）あるいは72

時間ごと（四日熱）と違いがあります。

一次的に熱が下がったからと安心して治療を行わないと、貧血や黄疸（皮膚や白眼が黄色く染まる）などの症状が現れます。さらに進行すると、肝臓や脾臓が腫れて大きくなり、それに伴って血液中の血小板（出血を止める成分）も減少します。

マラリアのなかでも、三日熱や四日熱、卵形マラリアは、命にかかわる状態にはなりにくいですが、熱帯熱マラリアは腎臓や脳の障害を起こし、重症化することがあります。したがって、マラリアの流行地域から帰国したあとで発熱した場合は、できるだけ早めに医療機関を受診し、適切な検査や治療を受けることが必要です。

マラリアにはワクチンはありませんが、流行地域に出かけるときには、出発前にマラリア予防薬を飲むことが推奨されています。長崎大学病院には「熱研内科」という診療科があります。流行地域に出かける前や帰国後に熱が出た場合には、ぜひ相談してください。

次号（2016年6月号）では「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）」を取り上げます。